# 解放後における韓国知識人層の植民地支配への認識と関係史構成の変化

金 泰雄（ソウル大学）

原文は韓国語、翻訳：尹在彦

1945年8月15日、韓国人の日本帝国からの解放は脱植民地化の課題と共に新国家建設の問題を本格的に提起する契機となった。しかしながら、冷戦の深化と朝鮮戦争により南北政権は相異なる新国家建設及び政治体制を巡る競争に邁進した結果、脱植民地化の課題は後回しにされてきた。1950年代の韓国の学界はもちろん、教育現場は政権の正統性の問題から専ら反共と反北朝鮮のイデオロギーの拡大再生産と教育に重点を置いていた。

ところが、1965年の韓日国交正常化を巡り、植民地支配の問題が本格的に提起され、植民史観（訳注：植民地を正当化する歴史観）の克服問題が徐々に学界を始め知識人層内部から議論されはじめた。こうした中で、東アジア関係史への認識は弱まり、概説書と教科書の構成に占めるその比重も減少していった。それ以降、冷戦の弱体化の中で東アジア史が浮上した。本発表では韓国の政局の変動及び脱植民地化の課題が相互に連動する中で起きつつある、東アジア史教育の変化を追っていく。

■金 泰雄（KIM, Taewoong）

1984年、ソウル大師範大学歴史教育科卒業。1990年同大学大学院国史学科修士、1997年同大学大学院博士。文学博士。現職はソウル大師範大学歴史教育科教授、専門分野は韓国近代史、韓国社会経済史。

主な著作：『뿌리 깊은 한국사 샘이 깊은 이야기 6—근대편（根の深い韓国史　泉の深い物語6－近代編）』（솔、2003）。『한국근대 지방재정 연구（韓国近代における地方財政の研究）』（아카넷、 2012）。『대한제국과 3·1운동（大韓帝国と3・1運動）』（휴머니스트、2022）。